Baxter

日本麻酔科学会　第68回学術集会　共催セミナー LO8
The 68th Annual Meeting of the Japanese Society of Anesthesiologists

人生100年時代を支える周術期管理:デスフルランの果たす役割

Perioperative management matching the era of the 100-year-life: The role of Desflurane

座長 新山 幸俊 先生
秋田大学医学部附属病院
麻酔科 教授

演者 河野 崇 先生
高知大学医学部麻酔科学・
集中治療医学講座 教授

事前予約を行っております。
（公社）日本麻酔科学会
第68回学術集会HPより
ご予約ください。

2021年 6月3日(木)
12:00～13:00

第7会場 神戸ポートピアホテル
南館B1F エメラルド

WEB配信期間
2021年
6月5日(土)～7月9日(金)

共催:公益社団法人日本麻酔科学会／バクスター株式会社
著作権:公益社団法人日本麻酔科学会　問合せ先:バクスター株式会社 ホスピタルプロダクト事業部 03-6894-3010

JP-PH49-210006 Ver1.0

日本麻酔科学会　第68回学術集会　共催セミナー LO8
The 68th Annual Meeting of the Japanese Society of Anesthesiologists

人生100年時代を支える周術期管理:デスフルランの果たす役割

Perioperative management matching the era of the 100-year-life: The role of Desflurane

演者 河野 崇 先生
高知大学医学部麻酔科学・
集中治療医学講座 教授

日本人の平均寿命は男女ともに毎年最高値を更新しており、「人生100年時代」の到来も現実味を帯びてきた。超高齢社会を迎えた現在、「健康寿命の延伸」は国家的命題となっている。わが国のレセプト情報・特定健診等情報データベースにおいても、65歳以上の高齢者の全身麻酔件数に占める割合が2017年度の時点で半数を超えている[1]。高齢者に対する周術期管理法は高齢化のスピードに追いついていないのが現状といえる。

術後せん妄（Postoperative delirium: POD）は、高齢患者に頻度が高く、術後死亡率増加や認知症発症と関連する。PODの予後を改善するためには、早期発見・早期介入により、その遷延化および重症化を防ぐことが重要である。われわれの研究グループは、高齢動物を用いた研究において、PODの発症には術後早期に生じる加齢性の脳内神経炎症が関与することを示した[2]。また、欧米の診療ガイドラインでもPODのスクリーニングおよび介入は術直後、麻酔回復室から開始することが推奨されている[3,4]。

デスフルランは、血液/ガス分配係数が0.42[5]であり、高齢患者においても速やかな麻酔覚醒が得られ（$p<0.05$ vs セボフルラン、t検定）[6]、認知機能の回復が早い［$p=0.02$ vs セボフルラン、Pearson's χ^2検定：DST（Digit Span Test）を用いた検討］[7]という特徴を有する。このような本剤の長所は、術後早期のPOD対策を実践するうえで有利となる。麻酔からの質の高い回復は、誤嚥防止、コミュニケーション促進、早期離床に繋がり、他の術後合併症を予防・軽減することも考えられる。今後、これらを裏付ける本剤のエビデンスの確立が求められる。

超高齢社会における高齢者周術期管理に関する情報を断片的ではなく、大きくまとめて国際的に発信することはわれわれ麻酔科医に課せられた重要課題といえる。本講演では、POD対策を中心に高齢者に対する最適な周術期管理とは何か、その中でデスフルランの果たす役割について議論したい。

1) 厚生労働省: 第4回NDBオープンデータ L麻酔 性年齢別算定回数, 閉鎖循環式全身麻酔1～5
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000177221_00003.html
2021/1/7参照
2) Kawano T, et al. J Anesth. 2018; 32(4): 506-517.
3) American Geriatrics Society Expert Panel on Postoperative Delirium in Older Adults. J Am Geriatr Soc. 2015; 63(1): 142-150.
4) Aldecoa C, et al. Eur J Anaesthesiol. 2017; 34(4): 192-214.
5) Eger EI 2nd. Anesth Analg. 1987; 66(10): 971-973.
6) Heavner JE, et al. Br J Anaesth. 2003; 91(4): 502-506.
7) Rörtgen D, et al. Br J Anaesth. 2010; 104(2): 167-174.